



# おちほ

第41号 平成13年10月7日 発行 社会福祉法人 椎の木会 落穂寮 発行者 山下 陽一

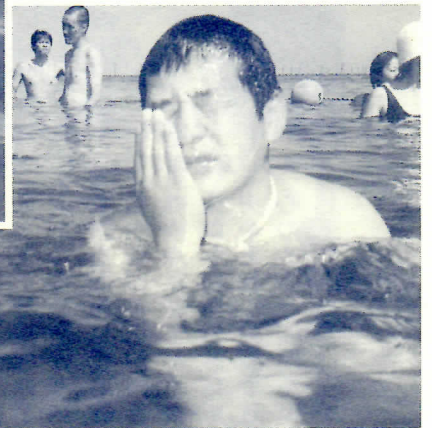
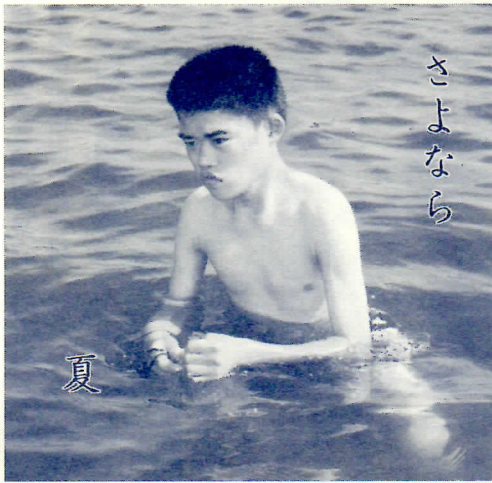
ありがとう

今津荘



さよなら

夏



今年も毎年恒例の湖畔学舎へ7月25日から27日までの3日間行って来ました。今年も猛暑でしたが、この三日間もものすごい暑さ。琵琶湖で泳ぐには絶好の天気でした。今津荘に着くと昼食を食べ早速湖へ。水の大好きな寮生さんはもちろん大よろこび。職員と一緒に水をかけたり、かけられたりと大はしゃぎ。普段は水が苦手な寮生さんも「こう暑いとかなわん」とばかり、まるで避難するかのようによく泳いでいました。日中は三日間共にこのように過ごし、夜は花火やキャンプファイヤー。職員の出しものもあり、歌ったり踊ったりとても楽しい夜になりました。帰りのバスでは遊びつかれてウトウトする寮生さんも…。

さて、ここ何年かお世話になってきた今津荘ですが、残念なこと今年で営業を終了することになってしまいました。来年には福祉関係の施設に生まれかわるそうです。帰りのバスに乗る前に、職員の方、そして今津荘に感謝とお別れの気持ちを含め、みんな「ありがとうございました」としっかり挨拶をしてきました。

さよなら今津荘。今までありがとう。



# 昔々今ふく

石部地区に五つの施設があり、それぞれ独自の特色を発揮して運営されているが、さて当方に独自のなるものが有るとすれば一体何であろうか。一家に家風があるがごとく福祉施設のそれは如何ようなものなのか。施設を訪ねたとき、



▲S48.8.9 食堂前にて保母さん手作りのすきやき給食

がその施設の味を語っている、先輩に言われたことがある。人が出入りしやすいオープンな、いつも前向きな施設でありたいと思う。

少人数(20人)の定員で出発した落穂寮の創立は、多くの関係者が危ぶんだ。戦前からの民間施設が運営に四

苦八苦しているとき、他に先駆けの出発は時期尚早で暴挙とさえ言われた。親許の近江学園を巣立ち、よちよち歩きが始まった。旧料亭を改装した座敷で肩を寄せ合い、憩いの時も食事の時も学習の時も職員を交えた車座が一体感を作っていた。四六時中寝起き一緒の師弟同行同労の日々から寮風が生まれていった。寮生も職員も落穂寮共同体の生活に積極的に参加し、役割りを分担し成果を分かちあひ乍ら共生共感が生まれた。

指導現場の若い女子職員が調理業務に入って、若向きの工夫をこらした食事が食膳を賑わし大好評だった。食事が栄養の観点だけでなく寮生の心に通わせた工夫やそれに感謝する心の大事な問題が提起されたのだ。女子

職員を採用するとき、食事を考える心の大切さを話し、ときに調理業務につくことを了解してもらったのである。

生活のリズムが健康を促進し、活性化すると考え、日課の中に動と静を折りまぜて組み立てるよう試みられた。起床直後の早朝マラソンで一汗かいた後に、明るい一日が始まる。生活を学び、労働し楽しむ。自然の変化に向きあって生活の酷しさもつらさにも耐える力を養うことができる。そしてまた自然のやさしさや温かさ

に包まれて快適な役事やリクレーションをエンジョイする。苦も楽も共有し、人と交わりながら豊かな人間性を育てることができる。

自然の恵みや人々の温さにも感謝しながら、生活即教育の実現がはかれると考えてきた。

(13・9・10)

理事長 増田正司

# 寮生の生活を考える

# 昔々今ふく



# 石積み

## 寮長山下陽一

### Mさんの石あそび

Mさんは炎天下のグラウンドの片隅でひとり座り込んで石遊びをしています。小石を寄せ集めたり押しひろげたり、さつきから同じことをなんども繰り返しています。私も彼女の前に座り込み、両手で小石をすくい上げては手のひらの間から少しづつ落とすとしてやると、二回ほどはそれを受け取ってくれて遊びますが、あとは「もうあっちへいって」といわぬばかりです。石遊びはひとりであるのが楽しいようです。自分の手と石との往復感覚は閉塞的で随分孤独な遊びをしているのだとおもいます。その遊びも外で遊んでいるときはまだ良いのですが、石ころを五つ六つと部屋の中に持ち込んでしまうと、一騒ぎがおきてきます。彼女にとってはかけがえのない大事な自分の世界と宝物ですから、屋外も部屋の中もありません。

石積みがこの上なくいとおしい物語があります。

### 賽の河原和讃

「これはこの世のことならず、死出の山路の裾野なる、賽の河原の物語……」で始まる賽の河原和讃はそれを唱えるとき、情景がはつきりとした動画として心の中に結びます。

「一重積んでは父のため、二重積んでは母のため、三重四重と積むときは、兄弟わが身を回向(えこう)して、昼はひとりであそぶども、日もいりあいのそのころは、地獄の鬼が現れて積みたる塔を打ち崩し、また積み積めと責めければ、幼子あまりの悲しさにまことやさしき手を合わせ、許したまえとふしおがむ。」

たよる人もいない、ひとりぼっちの世界にいる子どもが、たわむれにそばにある石ころを相手に一つ積み、二つ積んで遊んでいる情景を思うと、寂寞としたものが染み渡ってきます。わたしはこの和讃は黙示文学のひとつに位置付けられるものだと思いますが、この内容はあの世の我が子を偲ぶのではなく、現代社会の子どもたちが置かれている実態を語っていて、そのことが私の心に何の抵抗もなく、今生きていることも私たちのいとおしさに直結させてくれるのではないかと感じるのです。

現代社会はおとなたちがどのようにならざるに、小さく不安で弱く無抵抗な子どもたちに、巨大なものととして襲いかかりおびえさせ、さらに芽生えかけた自我や自尊心まで傷みつける、こんな情景はあの世の「賽の河原」のことではなく現実のことも私たちのこんな思いをさせているのではないだろうかと思いがもともめられていてのではないかと思えます。

ひよっとしたら、Mさんの孤独な石遊びは単純な時間つぶし、暇つぶしではない

く、おとな社会のひずみを私たちに代わって回向してくれているのかもしれない、いまのまましか思うのはこちらの至らなさによるものかもしれない。

### なぜ、今こどもたちに

最近西宮でこどもが、実の母親から虐待を受けて亡くなり、夫婦は死体の処分についてビニール袋に詰めて運河に投げ捨てたという事件が報じられていました。痛ましい事件で、毎日毎日の虐待に、周囲の大人たちはなにもできなかったのか、問われるべきだとおもいます。そして今、こどもたちはビニールの袋詰めにはいたらないけれども、たくさんのこどもが理不尽な扱いを受けおびえて泣いているのではないかと思われまます。

ひと昔前のことですが、買い物の帰り、正面出入口のところ、おそらく三歳に達していないのではないかと思われる子どもが、母親らしき人から殴られているのです。子どもは床に倒れて起きようとしていない。傘のようなもので遠い討ちをかけている。周囲の人たちも追まきに眼をそむけながら行き交っていました。わたしは思わず聞きこえよがし「やってくれやないか」というと近くの年配の婦人が「そうなのよ、私もいい加減にしてあげて、というよ、自分の子や、ほつといてくれと、こうなのよ」とホトホトあきれた顔をして顔を見合わせました。

あの女の子は人通りのあるところであんな扱いをされているのだから、日常家庭ではどんな仕打ちを受けていることだらうと思うとその幼い女の子がきどくでなりませんで。このようなことはあちらこちらにたくさんあることでしょう。こどもたちにとって現代社会はある一面では「賽の河原」になってはいないだらうかと常々心配しています。

親かと思ひ馳せらる。嶺のあらしの音すれば、父かと思ひ馳

せのぼり、谷の流れを聞くときは母かと思ひ馳せくだる。「泣く泣く寝入る折からに、またせり、こやかかしこ泣き歩同一に起きあがり、こやかかしこ泣き歩く」親たちは大事に育ててくわいい盛りく幼児を思わぬことで亡くし、その癒せない思いがことばとしてあふれた「あの世の物語」に、肺腑をえぐられるような感動をおぼえます。しかし、これは今日十分に母子分離ができていないのにも関わらず、親たちの仕事の都合で施設や保育所に入っているこどもたちはこんな孤独な思いをさせているかもしれない。

### かざぐるま

数年前の秋、盛岡で職員研修会があったとき、せつかくこまできたのだから少し足を伸ばして、下北半島の「恐山」にいつてみよう、と同行の保母さん二人と共に出かけました。

ここにも「賽の河原」があり、橋のたもとのみやげ物屋にピンクの薄いプラスチックでできた風車がたくさん売られていました。登っていくと所々に硫黄の匂いがして煙をふいているのですが、大きな湖は緑色をしていて生物が住んでいる気配もありません。

荒れた山肌カラスが鳴いていてそして何千何万の風車があるところから立てられていました。風が吹くと、それらがカラカラときしむ音をたてて一斉に回ります。和讃の中の幼児が親をあちらこちら探して、弱く無抵抗な子供たちの様子に眼に浮かんでくるように訴えかけてきます。このあたりは小さい子を一度育ててみればよくわかるのですが、この感受性をこぼして伝えることは大変むつかしいことかもしれません。こどもたちやMさんの石あそびは、賽の河原の孤独な子供たちの石積みによく似ています。







## 男子棟飯盒炊さん

『読めますか?』

8月2日(木)、男子棟は土山の鮎川の鮎川(読めますか?)へ行きました。寮生さん三十名、職員十名の大人数で、マイクロボス、ワゴン、トラックの三台を使っての移動でした。平日ということもあってか、誰もおらず、私達の貸し切りでした。広い河原にきれいな川と青い空、最高の場所でした。この日はとても暑かった

ので、タープ(屋根)を作りました。ところが意外と風が強く、タープはバタバタだし、途中で倒れてしまいました。それならと川遊びをしようとして水着に着替えて川へ。

しかし川という事で、とても冷たく、深い所も多かったため、ずっと川遊びできそうにもなく、早目に切りあげ、お待ちかねの昼食へ。今回はバーベキューをしました。肉や魚貝類、野菜とたくさん用意しました。川遊びをした後とあつてか、みなさん食欲旺盛、焼いても焼いても間に合わず、焼いている職員に「次、まだー?」と言われ、「これ火、せるあまり、「これ火、通ってないよー」と言われたりと大変でした。デザートは川で冷やしたスイカ。とても冷たくて自然の力に驚いてしまいました。夏の日差しを受けてみんな日焼けして落穂に帰ってきました。いい所なので、ぜひみなさんも行かれてはどうですか?

△ナマはイヤだけど早くたべたいナー。

鮎川  
(ちなみにうぐいがわと読みます。)



△冷たすぎてはいれないよー。

もいます。中にはガチャガチャンネルばかりまわしている寮生さんもいます。(気になると止めて見ますが)。テレビの見方にもこだわりがあるのです。

寮生さんは、私達が気付かないテレビの見方を教えてくれます。でも寮生さんは九時には消灯して寝てしまうので、深夜番組の存在は知らないのです。残念。

## 「テレビ」

それぞれの楽しみかた

みなさんも家でテレビを見るように、寮生さんもテレビを見て自分の時間を過ごしています。

男子棟のホールには、3台の大きなテレビがあり職員と一緒に見たりしています。しかし、中には自分の部屋に自分専用のテレビがある寮生さんもいて、自由な時間に自分専用のテレビでおのおのに楽しんでます。大好きな料理や音楽の番組を見たり、コーンシヤルが好きであれば見る寮生さん



△それぞれの部屋で思い思いの番組を楽しむ寮生さんたちです。



# 自然を大満喫！

空はあいにくの曇空、空から何やらポツポツと冷たいものが降ってきました。今回の飯盒すいさんはどうなることやら……。でもそこは女子棟。日頃の行いが良いのか天気もなんとか持ち直し新しいマイクロバスに乗ってさあ出発。目的地は甲賀町にある『高間みずべ公園』。バスの中ではこれから始まる楽しいことにドキドキワクワクなんだか落ち着かない様子でした。みずべ公園に着いても興味深そうに準備を眺めたり、散歩へ行ったり。みんなすっかり体を動かした



てお腹を減らしたあとはいよいよおまじかねのパーベキュー。みんな「あっ」という間に平らげ、野菜やお肉も焼き上がるまで待つてないっ!! という感じでお皿をつき出して催促していました。満足したあとは人工の川で水遊び。用意周到な寮生さんは水着に着がえて本格的に水遊び。すべり台をすべったりおふろのようにつかってみたりととても楽しそうでした。あいにく水着を持っていかなかった寮生さんはズボンのすそをめくっておおそるおそる向こう岸に渡ったり、すべりそうになり一瞬間がこわばっていたり、そうかと思えば楽しそうな表情で水に足をつけたり、そんな様子を楽しそうに見ていたり、職員のお手伝いをしてくれる寮生さんもいたり。短時間ではありましたがひとりひとりの寮生さんの素顔がよく見えたように思います。暑くもなく寒くもなく途中で雨がポツポツと降ってきた時にはドキッとしましたがすぐにやみ、大自然の中でおいしいパーベキューを頂くことができました。きつと寮生さんも楽しい一日だったのではないのでしょうか？ また次回楽しみにして下さいね。おつかれ様でした。

# 「はあー疲れた……」

残暑が厳しい今日この頃ですが8月の猛暑の影響が今、女子棟の寮生さんに表れています。

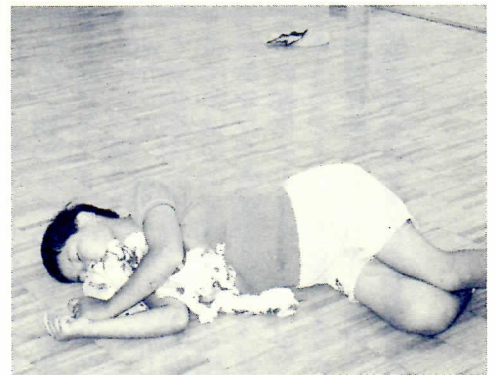
おやつ後の自由時間には、ホールや居室で横たわる姿がたくさん見られるのです。しかも寝かたは人それぞれで、ソファで寝転んだり、ホールで他寮生さんと添い寝したりと、なんとも愛くるしい光景です。

今年の特にとっても暑い日が続き、寮生さんに限らず職員や世の中の人たちみんなが暑さには参ったものです。そんな暑い真夏にでも寮生さんは午前中の歩行は欠かさず



ホールでおひる寝

夕陽に照らされ、ポカポカとしてくると、夏の疲れと一日の疲れが、夜を待たずにやって来てしまいうのだと思います。夜もしっかり睡眠をとっているはずの寮生さんが、お昼にもぐっすり寝入ってしまうのを見ると、毎日一生懸命作業に取り組んでいる姿が思い浮かび、起こさずにそっと布団をかけてあげたい気分になります。夏の疲れをお昼寝で癒しながら、これからも元気に毎日を過ごして行ってもらいたいものです。



エネルギー充電中



去る六月二十八日に石部中学校の一年生と交流会が行われました。寮生にとって、地域の方たちとの交流はほとんどないので、この日の日課はとて新鮮味があつたと思います。

体育館で石部中の生徒さんを見た途端、嬉しくて走り寄って行く寮生さんみれば、緊張のあまり入り口で少し硬直している寮生さんもいました。しかし、緊張では石部中学校の生徒さんも同じで初めはどう接したらいいのだろうという不安な顔をされてしまいました。お互い、少し戸惑いながらではありましたが、日課の時間を一緒に過ごし、会話を交わして行くにつれて、打ち解け合えて楽しい時間が過ごせていた様に感じます。落穂寮は頻繁に交流を持つ事が出来ない分、今回の様な交流会ですしでも施設のこと、寮生さんの



△車椅子体験中の石中生徒さん

出来たら」など積極的な意見が聞けたことを嬉しく感じました。寮生さんの楽しむ顔を見ていると、保護者・職員だけではなく、可能な限りこの様な交流を持ち、地域の人たちとの関わりを持つことも必要だと考えさせられる交流でした。

## 石部中交流会

ことを知り、理解して行ってもらえたら光栄です。今回は本当にわずかな時間でしたが、寮生さんも笑顔が多く見られ楽しく過ごすことができ、良かったです。

中学校の生徒さんからも、「2度目の交流会では…」という質問に対して、「積極的に話してみよう」とか「いっぱい話したい」「楽しくゲームが



△オフロ掃除に励む石中生徒さん

## 競輪補助事業 完了のお知らせ

この度平成13年度の日本自転車振興会(競輪)の補助を受けて、左記事業を完了いたしました。

### 一、事業名

平成13年度知的障害者更生施設の車両整備事業

### 一、事業内容

マイクロバス購入

### 一、補助金額

二、六二〇、〇〇〇円

### 一、実施場所

滋賀県甲賀郡石部町

### 一、完了年月日

平成14年3月31日

社会福祉法人権の木会  
理事長 増田正司



▽この六月に十二年間働き続けてくれたマイクロバスが、お役御免になりました。酷使され続けたバスは外見こそまだまだ現役ですが、中味を大量にとられた背もたれと大量の失禁を吸い込んでくれた座席は疲れ果てた様相でした。「これまで頑張ってくれてありがとう」と心から感謝しお礼申し上げます。代わって、七月下旬に日本自転車振興会(競輪)様の補助を受けてとて立派なバスを購入する事ができました。寮生・職員共々大喜びで、大事に使わせて頂きます。ありがとうございました。

## 木言

焼けつくような日照りが続いて、大木をなぎ倒す強風が吹いても、すべてを流してしまふ大雨でも、私達は自らそこからのがれることはできない。守る術を知らない。ただあなたを、あなたたちを信じて身を委ねるだけ。それ程私達は弱い存在なのです。でも、だからこそ感性は豊かで、少しの変化にも気付くことができるのです。よく見て下さい。素敵に咲いているでしょ。

